この後起ころうとしていること――天の幻

天の御座に着いている方（4:1–11）

はじめに

1:17 から始まったイエスご自身のことばは、ラオディキア教会へのメッセージをもって一度区切られました。4 章からは再びヨハネが主な語り手として、神がお与えになった啓示を伝えていきます。その記述は「その後、私は見た」から始まります（1 節）。また、2 節では 1:10 から 2 度目の「私は御霊に捕らえられた」というフレーズが出て来ています。「その後」（メタ・タウタ μετά ταῦτα）と「私は見た」（エイドン εἶδον）の組み合わせ（4:1; 7:1, 9; 15:5; 18:1）、また「御霊に捕らえられた」（エン・プニューマティ ἐν πνεύματι）（1:10; 4:2; 17:3; 21:10）はいずれも、黙示録の内容の区分を示す重要な指標です[1]。よって、この 3 つが冒頭で使われている 4 章から啓示の内容が新しい区分に入ることは明らかです。

さらに、1 節では本章から始まる内容が「この後必ず起こること」（ハ・デイ・ゲネスタイ・メタ・タウタ ἃ δεῖ γενέσθαι μετὰ ταῦτα）だとヨハネに告げられています。これは、1:19 でイエスが書き記すよう命じられた内容のうち「この後起ころうとしていること」（ハ・メレイ・ゲネスタイ・メタ・タウタ ἃ μέλλει γενέσθαι μετὰ ταῦτα）と対応しています。ここからも、黙示録の内容は「この後起ころうとしていること」という新しい区分に入ったことが分かるのです（1:19 講解ノート参照）。

「あなたが見たこと」（1:9–20）と「今あること」（2:1–3:22）の繋ぎ目は、イエスによる「七つの星と、七つの金の燭台の、秘められた意味について」の解説である 1:20 でした。「今あること」と「この後起ころうとしていること」（4:1–22:5）の内容は、全体的に密接に関わっています（2:1–7 講解ノートのはじめに　１．５）参照）。しかし、あえて繋ぎ目を探そうとすれば、それは最後のラオディキア教会への手紙、特にその最後の「勝利を得る者」への約束であった 3:21 だといえるでしょう。

そこで与えられていたのは、天で座しておられる父なる神と、十字架による勝利を得た後に神の右に座しておられるイエス・キリストのイメージです（3:21b–c）。この背景に詩篇 110 篇があることは既に指摘しました（3:21 講解ノート参照）。読者がその詩篇の流れを覚えていれば、メシアなるイエスは将来の「御怒りの日に王たちを打ち砕」き（110:5）、王の王と

[1] 参照：テニイ『黙示録』38–41 頁; C. R. Smith, “The Structure of the Book of Revelation in Light of Apocalyptic Literary Conventions,” *Novum Testamentum* 36/4 (1994): 373–93; R. J. Korner, “‘And I Saw . . .’ An Apocalyptic Literary Convention for Structural Identification in the Apocalypse,” *Novum Testamentum* 42/2 (2000): 160–83.

して「力の杖をシオンから伸ばされる」（110:2）という希望を思い起こすことができたでしょう。4 章以降で語られていくのは、まさにその内容です。

- 父なる神とイエスが天におられる（4–5 章）。
- 御父と御子は地上に「御怒りの日」をもたらす（6–18 章）。
- イエスが王として地上に戻ってきて敵と戦われる（19 章）。
- イエスはご自分の王国を確立される（20 章）。
- 最後にその御国は「父である神に渡され」（I コリ 15:24）、新天新地における永遠の御国が完成する（21–22 章）。

特に 4–5 章では、イエスが 3:21 で言及しておられた「王座」（スロノス θρόνος）という語が頻繁に登場しています（4:2, 3, 4, 5, 6, 9, 10; 5:1, 6, 7, 11, 13）。よって、4–5 章は王座をモチーフとして統一されたひとつのユニットとして見るべきだと考えられます。

この 2 つの章は、神が地上に御怒りを注がれる 6 章以降の土台となっています。具体的に言えば、この地上に御怒りによるさばきが注がれるのは、万物の創造主であり主権者である神のご計画です（4:11）。また、さばきの目的は子羊の王国が実現してその栄光が顕されるためですが（5:9–12）、究極的にはそれを通して御父と御子の栄光が被造世界に顕されるためです（5:13–14）。そして、このさばきを下すことができるのは、屠られて贖いを成し遂げられた子羊イエスだけなのです（5:5–10）。

このうち 4 章では、被造世界に対する神のご計画が示され、イエスがその計画を成し遂げようと動き始められる 5 章の場面設定が示されています。神の御座がある天において、「二十四人の長老たち」（4:4）や「四つの生き物」（4:6–7）が礼拝を献げている様子です。そして、最後に創造主なる神の栄光がほめたたえられます（4:11）。よって、内容的には 4 章と 5 章の間に区分を設けることができます。

本章のアウトラインは以下のように示されます。

1. 幻を見た時の状況（1 節）
2. 天の御座に着いている方（2–3 節）
3. 24 人の長老たち（4 節）
4. 御座の前の様子（5–6 節 a）
5. 4 つの生き物（6b–8 節 a）
6. 天での礼拝（8b–11 節）

2–3 章の 7 つの教会への手紙には、実践的なメッセージが凝縮されていました。同時に、それらの手紙において、これから後に「起ころうとしていること」――これから先に待っている祝福がどれほど素晴らしいものかも教えられていました。

これまで朗読を聞いてきた人々は、これから伝えられようとしている「この後起ころうとしていること」に期待を膨らませたことでしょう。そのような読者にまず伝えられていくのは、私たちの神の圧倒的な素晴らしさです。私たちが信じている神は「聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者。昔おられ、今もおられ、やがて来られる方」、「栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方」、「万物を創造され」た方です。

私たちが黙示録の 3 番目のセクションに入っていくに当たり、まずは改めて、神の偉大さを賛美するところから始めていきましょう。

講解ノート

１．幻を見た時の状況（4:1）

4 章 1 節

「その後、私は見た」というフレーズ（1 節 a）は、黙示録の中で新しい場面に移ることを示す目印のひとつです（はじめに参照）。ある注解者は、特に「その後」（メタ・タウタ）が前に啓示された事柄との時系列的な繋がりを強調していると解釈しています[2]。これを踏まえると、3 章までは「今あること」（教会時代）について啓示されていたので、4 章からは時系列的に教会時代の後の事柄が啓示されているということになります[3]。

確かに、4–5 章が導入部となっている 22:5 までの啓示は、その内容（全世界へのさばき、メシアの地上的王国、新天新地）から将来に関するものだと分かります。しかし、メタ・タウタというフレーズ自体は、ヨハネが幻を見ているという文脈で理解されるべきです。すなわち、このフレーズは単にヨハネが見せられていた幻そのもの、またはその場面が移り変わったことを示しているに過ぎません[4]。それらの幻を通して啓示されたことの時系列的な繋がりを推測する必要があるとすれば、あくまで内容そのものの解釈に基づく必要があります。ヨハネはこれまで、栄光に輝くイエスの幻を見て、そのイエスから宛先の諸教会へのメッセージを受け取りました（1:10–3:22）。本節から、ヨハネは新しい幻を見せられることに

[2] Fruchtenbaum, *The Footsteps of the Messiah*, 164.
[3] Ibid.
[4] Thomas, *Revelation 1–7*, 333.

なります。

ヨハネが見せられたのは天の「開かれた門」でした（1 節 b)。「見よ」（イドウ ἰδοὺ）という感嘆詞は、新しい幻を見せられたこと、また神ご自身が特別にその幻を見せてくださったことを読者に向かって強調しているのでしょう[5]。「開かれた」（エーネオーグメネー ἠνεῳγμένη）は完了形なので、ヨハネが見た時には既に開かれていたことが示されています。

また、「天」（基本形オウラノス οὐρανός）はヘブライ語の「天」（シャマイーム שָׁמַיִם）と同じで「空」も指す言葉です。実際に、聖書は文脈によって、シャマイーム／オウラノスで様々な空間を表しています。第一の用例は大気圏や鳥が飛ぶ空間としての空（例：創 1:20; 詩 147:8; エレ 4:25; 使 14:17)、第二の用例は天体が存在する宇宙空間（例：創 1:14–18; 22:17; エレ 31:37; マタ 24:29)、第三の用例は神が臨在される空間としての「天」です（例：詩 103:19; マタ 6:9–10; 使 7:56; ヘブ 8:1–2）[6]。パウロは第三の意味を文字通り「第三の天」（トリトウ・オウラノウ τρίτου οὐρανοῦ）と呼んでいます（II コリ 12:2)。

そして、聖書が伝えている「天」は何か抽象的な空間ではありません。最も重要なことは、「人間イエスが、完全な体を持って復活した状態でいまや『天』にいる」ということです[7]（ヘブ 8:1–2; 9:24)。天は非物理的な場所ではなく、神が創造された物理的な世界の一部です[8]。しかし、それは宇宙空間に天があるということではありません。確かに、天は通常、地から見ることはできません。しかし、復活されたイエスの顕現を考えると「天は地に接点を持ち、そのため天にいる者」、特に偏在というご性質を持つ三位一体の神は「地上のあらゆる場所に、同時に存在できる」といえます[9]。したがって、地から見た天は別次元の場所であり、天と地は「神の良い創造の二つの異なる次元」だといえるでしょう[10]。

黙示録は 4–5 章だけではなく、様々な箇所で天の様子に関する幻が伝えられています。そういった描写がこの時ヨハネが見せられた幻に特有のものなのか、それとも実際の天もそのとおりなのか、私たちに判別することはできません。筆者個人としては、ヨハネが見せられたのは別次元の空間である天の様子そのものであり、私たちが死後に（または空中に来られるイエスによって引き上げられた後に）迎え入れられるのは黙示録で伝えられているとおりの場所であると信じているところです。

---

[5] Ibid., 334.

[6] 聖書における「天」についての要約は、A. W. Gomes, “Question 7: What Does the Bible Mean When It Speaks of ‘Heaven,’” in *40 Questions About Heaven and Hell* (Grand Rapids: Kregel, 2018), Kindle locations 1091–223 を参照されたい。

[7] N・T・ライト『驚くべき希望　天国、復活、教会の使命を再考する』中村佐知訳（あめんどう、2018 年）196 頁。

[8] Garland, *Testimony*, 1:287–88.

[9] ライト『驚くべき希望』196 頁。

[10] 同上。

新約の著者たちは、空が開く（マタ 3:16; 使 7:56; 10:11）または裂ける（マコ 1:10）というイメージを使って、神が「天」から特別な啓示を与えてくださったことを描写しています。特にイエスの受洗の場面（マタ 3:16; マコ 1:10）では、イエスが天が開く／裂けるのを「ご覧になった」と言われているので、実際に目に見える現象が起こったとも受け取ることができます[11]。黙示録では、オウラノスはほとんどの場合神が臨在される場としての「天」を指しています。よって、ここでの光景は空が開いた（ように見えた）というよりも、天で門が開いている様子が描かれているのかもしれません（参照：エゼ 1:1）。しかし、ヨハネが幻を見ている中で「開かれた門」に「上れ」と命じられていることから（1 節 e）、幻の中で大空の門が開いていたということもあり得るでしょう。

そして、ヨハネは「あの最初の声」が彼に語りかけるのを聞きました（1 節 c）。「最初の声」という言い回しは、彼がこの声を以前に聞いたことを示しています[12]。それは「ラッパのような音で私に語りかけるのが聞こえた」ものと同じ声でした（1 節 d）。これが該当するのは、1:10 以降で彼が聞いた「ラッパのような大きな声」、すなわち「人の子のような方」（イエス）の声です。7 つの教会へのメッセージが終わった後、イエスの姿はヨハネの前から消えたのでしょう。しかし、ここで与えられ始めた新しい幻も、イエスご自身が告げられた啓示の一部なのです（1:1）。

イエスが最初にヨハネに語りかけて言われたのは、彼が見た事柄を書き記せということでした（1:11, 19）。ここではまず「ここに上れ」と命じられています。「この後必ず起こることを、あなたに示そう」ということば（1 節 f）は、ヨハネがその門へ上ることによって、新たな啓示が与えられることを示しています。イエスはここで、ヨハネにさらなる啓示を受けるよう招いておられるのです。

その啓示の内容は「この後必ず起こること」（ハ・デイ・ゲネスタイ・メタ・タウタ）です。この表現を 1:19 の「この後起ころうとしていること」（ハ・メレイ・ゲネスタイ・メタ・タウタ）と比べると、「……しようとしている」（メレイ）が「……しなければならない」（デイ）に置き換えられていること以外、全く同じになっています[13]。イエスはここで、1:19 で書き記すようにお命じになった「この後起ころうとしていること」を、今からヨハネに示そうと宣言しておられるのです[14]。

これから啓示されるのが将来に関することだということは、天での光景が示されている 4 章だけでは不明瞭です。しかし、後の 5–22 章の内容によって、そのことが明らかとなりま

---

[11] D. E. Hiebert, *The Gospel of Mark* (Greenville, SC: BJU, 1994), 32.
[12] Fanning, *Revelation*, 197 n. 8.
[13] なお、1:19 との関連を踏まえると、4:1f での μετά ταῦτα は v. 1a とは異なり、場面転換ではなく将来という意味での「この後」を示している。参照：Thomas, *Revelation 1–7*, 337.
[14] Ibid.

す[15]。また、1:19 では「起ころうとしている」（メレイ・ゲネスタイ）と、啓示される事柄の成就が差し迫っていることが示唆されていました[16]。しかし、ここでは「必ず起こること」（デイ・ゲネスタイ）と、成就の必然性が強調されています。これから（6 章以降も含めて）啓示されていくことは、神のご計画において必ず起こらなければならないことです。よって私たちは、これから黙示録を通して知らされる事柄は間違いなく実現するのだと確信するように求められているのです。

２．天の御座に着いている方（4:2–3）

4 章 2 節

イエスからのことばを聞くと、ヨハネは「たちまち」、「御霊に捕らえられ」ました（2 節 a）。「御霊に捕らえられた」（エン・プニューマティ ἐν πνεύματι）は 1:10 に登場したのと同じ表現で、「霊に満たされた」（聖書協会共同訳）または「御霊のうちにいた I was in the Spirit」（King James Version, English Standard Version, Christian Standard Bible など）と訳すこともできます。これはヨハネが聖霊のコントロールの下に置かれたことを表しており、「その後、私は見た」と並んで黙示録の構成区分の指標となる表現です（1:10 講解ノート参照）。

ここでヨハネが改めて「御霊に捕らえられた」ということは、もしかすると 1:10 の時よりも聖霊の支配が強くなったのかもしれません。しかし、本文はそこまでのことは示唆していません。おそらく、3:22 をもってイエスから 7 つの教会の現状に対するメッセージが終わった後、ヨハネは一旦「御霊に捕らえられ」る前の状態に戻ったのでしょう。しかし、（おそらくはそのすぐ後で）再び「御霊に捕らえられた」のだと思われます[17]。

ヨハネは「すると見よ」と言うことで、聖霊の支配下／影響下で見せられたことに読者の目を向けさせます。彼が見たのは「天に御座があり、その御座に着いている方がおられた」という光景でした（2 節 b–c）。「御座」（スロノス θρόνος）は基本的に王座を指す語で[18]、王や権力者がそこから判決を下す場でもあります[19]。黙示録ではこれまで、神であるイエスが被造世界の王であり、さばき主でもあることが強調されてきました。そのような文脈で天の御座が現れていることから、読者は究極的な主権者の登場を期待させられます。

---

[15] Fanning, *Revelation*, 198.
[16] 3:7–13 講解ノートの **3 章 10 節 c–d：「試練の時」と患難期**における μελλούσης ἔρχεσθαι に関する解説を参照されたい。
[17] L. Morris, *Revelation* (Downers Grove, IL: InterVarsity, 1987), 88; Thomas, *Revelation 1–7*, 339.
[18] BDAG, 460.
[19] Thomas, *Revelation 1–7*, 339.

天の御座に着いている方について、ここではこれ以上描写されていませんが、読者にとってこの方が誰かは明らかだったことでしょう。聖書の伝統において、天は神が臨在しておられる場です。旧約時代、神は地上の幕屋や神殿でご自分の臨在を表しておられました。しかし、その旧約時代の人々ですら、神は天の御座に着いている方だと認識していました（例：I 列 22:19; 詩 47:8; イザ 6:1; エゼ 1:1, 26; ダニ 7:9）。そして、本章でも後になると天の御座に着いている方は「主なる神、全能者、昔おられ、今もおられ、やがて来られる方」だと明かされることになります（8 節）。

ヨハネの書き方は、自分が見た幻をまずはごく簡潔に述べ、それから詳細を告げていく傾向があります。このような書き方には、読者の注意を惹きつけ、その先の内容を期待させる効果があります。ヨハネは段階を追って、彼自身が幻から受けたのと同じインパクトを読者にも伝えようとしているのです[20]。

4 章 3 節

ヨハネはいよいよ「御座に着いている方」を描きますが、たとえばダニエル 7:9 の「年を経た方」のような直接的な描き方ではありません。彼はもっと間接的また抽象的に、「碧玉や赤めのう」といった宝石の「ように見え」たと述べています（3 節 a）。

詩篇 104:2 では、神は「光を衣のようにまと」っておられると歌われています。また、パウロは父なる神のことを「近づくこともできない光の中に住まわれ、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方」だと表現しました（I テモ 6:16）。ヨハネによる宝石のイメージを使った描写は、人間には表現し切れない父なる神の栄光を、なんとか言語化したものなのでしょう[21]。

宝石のイメージによる御座に着く神の描写は、エゼキエル 1:26–28 を思い起こさせます[22]。

> [26] 彼らの頭上、大空のはるか上の方には、サファイアのように見える王座に似たものがあり、その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあった。[27] 私が見ると、その腰と見えるところから上の方は、その中と周りが琥珀のきらめきのように輝き、火のように見えた。腰と見えるところから下の方に、私は火のようなものを見た。その方の周りには輝きがあった。[28] その方の周りにある輝きは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、まさに【主】の栄光の姿のようであった。私はこれを見て、ひれ伏した。そのとき、私は語る者の声を聞いた。（エゼ 1:26–28）

[20] Fanning, *Revelation*, 198.
[21] Beale, *Revelation*, 321; Osborne, *Revelation*, 228.
[22] エゼキエル書との具体的な比較については岡山『黙示録注解』130–31 頁を参照されたい。

ヨハネが使っている「碧玉」は、現代では不純物を含む緑・黄・赤・褐色などの曇った鉱物を指します。しかし、ここで使われている語イアスピス （ἴασπις）は青色や黄色、時には白色など、現代の碧玉だけではない様々な宝石を指す言葉です。学者によっては、オパールやダイヤモンドさえも含まれると主張しています[23]。確かに、黙示録 21:11 では新しいエルサレムの「輝きは最高の宝石に似ていて、透き通った碧玉のようであった」と言われていることからすると、ここでの「碧玉」は現代の不透明な宝石のイメージとは異なっています。もしかすると、4 章においても「碧玉」はダイヤモンドのように透き通って様々な色に輝いている様子を表しているのかもしれません[24]。

「赤めのう」（基本形サルディオン σάρδιον）は、現代の私たちもその名前から想像するように、赤色または茶褐色で半透明の（またはほぼ不透明に近い）宝石のことです。

そして、ヨハネは「御座の周りには、エメラルドのように見える虹があった」という不思議な描写をしています（3 節 b）。「虹」（イリス ἶρις）という名詞は新約聖書で黙示録（本節および 10:1）にしか出て来ません。古代ギリシャ語文献では、この語は「虹」だけではなく「円光／光輪」も指すことがあります[25]。多くの学者は、本節の描写とエゼキエル 1:26–28 が類似しており、特にエゼキエル 1:28 には「虹」が出て来ていることから、本節のイリスも虹を意味していると考えています[26]。ただし、七十人訳のエゼキエル 1:28 では「虹」を表すために「弓」という意味のトクソン（τόξον）が使われています。ヨハネも「虹」を意図していたのだとすれば、黙示録ではそれが「御座の周り（ククロセン κυκλόθεν）に……あった」と円形に御座を取り囲むイメージで語られていることから、よりその形状と合致するイリスを使ったのでしょう[27]。

しかし、御座を取り囲む丸い虹（ハロ）をイメージしていると、その光輪は「エメラルドのよう」（スマラグディノー σμαραγδίνῳ）であったという記述に当たることになります。この記述だけを見ると、通常の 7 色の虹とは違い、エメラルド単色の光輪が描かれているように思われます。よって、ここでは文字通り単色の光輪だと受け止めている注解者もいれば[28]、種々の緑色から成っている光輪という風に解釈する人もいます[29]。もしくは、ここで使われている形容詞スマラグディノス（σμαράγδινος）がプリズムに使われる透明な水晶も表すということで、虹色に輝く光輪が描かれていると解釈する人もいます[30]。

---

[23] BDAG, 465.
[24] Thomas, *Revelation 1–7*, 342.
[25] BDAG, 480.
[26] 例：Thomas, *Revelation 1–7*, 343; Beale, *Revelation*, 321; Osborne, *Revelation*, 227; Fanning, *Revelation*, 199.
[27] Thomas, *Revelation 1–7*, 343.
[28] Fanning, *Revelation*, 199.
[29] Thomas, *Revelation 1–7*, 344.
[30] Osborne, *Revelation*, 227.

当時の知識に限界がある現代の私たちには、ここでは眩い光輪が御座を囲んでいたと想像するのが精一杯といえるでしょう。

なお、21 章では「碧玉」が新しいエルサレムの輝きを表すために（21:11）、また「都の城壁」の素材として登場しています（21:18）。また、21:19–20 では「碧玉」、「赤めのう」、「エメラルド」が「都の城壁の土台石」の飾りとして言及されています。ヨハネは、21:1–22:5 の幻まで見た後で黙示録を書き記したはずです。彼は神の栄光を描き出すため、最後の幻で見せられた宝石から特にふさわしいものを選んで用いたのかもしれません。

さて、本節で使われている宝石の種類や虹のイメージについて、まずは「個々の要素に象徴的意味（symbolism）を見出す必要はない」と考えることができます。それらのイメージは、単に神のすべてに優る栄光を描き出すために使われているということです[31]。既に 1:9–20 講解ノート（特に 12–16 節のノート）で述べたように、預言書における鮮烈な象徴的表現は読者に強烈な印象を伝えることを目的としています。特に、当時の読者は朗読によって黙示録の内容を受け取りました。その場合、一つ一つの表現が吟味されたというよりも、まずは聞くことで読者自らイメージを描き出していき、全体的な印象を受け取ったと考えるのが現実的でしょう。

しかしながら、これらは一言一句霊感を受けた聖書のことばであるため、個々の要素の意義を読み取ることが重要だと考えることもできます[32]。そのような姿勢で解釈する場合、個々の要素が既に与えられている啓示（特に旧約の啓示）でどのような意義を持っていたかを探ることが大切です。

まず、「碧玉」、「赤めのう」、「エメラルド」などは大祭司の胸当てにはめ込む 12 の宝石の一部として出エジプト記 28:15–21 に登場しています。それらの宝石はイスラエルの 12 部族を表すものであり、「碧玉」は最後の部族であるベニヤミン族、「赤めのう」は最初のルベン族を表しています。「エメラルド」は出エジプト 28:17 で 3 番目に登場しているため、レビ族を表していると思われますが、中には（12 部族の種々の数え方に倣って）次のユダ族を表していると可能性もあります。よって、ヨハネはイスラエルを表す宝石を使うことで、御座に着いている方がイスラエルの神であることを示していると考えることができます[33]。

黙示録は、被造世界に対する神のご計画の完成について啓示しています。その中には、イスラエルの民の完成も含まれています（参照：3:9; 7:4–8; 21:12）。よって、ヨハネが神の栄光を描写しつつ、この方がイスラエルの神である【主】だと強調したとしてもおかしくありません。

---

[31] Johnson, “Revelation,” 641.
[32] Thomas, *Revelation 1–7*, 341–42.
[33] Walvoord, *Revelation*, Kindle locations 1594–602; Garland, *Testimony*, 1:288.

しかし、黙示録の文脈でより明らかなのは、既に指摘したエゼキエル 1:26–28 との対応です。ヨハネは眩く輝く神の栄光の中に、燃えるような赤色の輝きも見ていたようです。これは、エゼキエルが神の栄光の輝きにおいて「火のようなものを見た」というイメージと調和しています（エゼ 1:27）。また、御座を囲む光輪のイメージも「その方の周りにある輝きは、雨の日の雲の間にある虹のようであり」というエゼキエル 1:28 の記述と調和しています。

エゼキエルは、このように描かれた神から「反抗する国民」であるイスラエルへさばきを告げる預言者として召し出されました（エゼ 2:1–8）。ヨハネもまた、神から全世界に下されるさばきを預言するために啓示を与えられていきます。さらに、表にも裏にもさばき（嘆きと、うめきと、悲痛）が記された巻物（エゼ 2:9–10; 参照：黙 5:1）、巻物を食べよという命令（エゼ 3:1–3; 参照：黙 10:8–11）など、エゼキエル書の序盤には黙示録でも後に登場するモチーフが登場しています。よって、黙示録 4:3 で描かれているのは、さばき主なる神のイメージであるという可能性が考えられます[34]。

そのようなイメージが意図されているのであれば、ノア契約の「しるし」として与えられた虹（創 9:13–17）のイメージが現れていることも重要になりそうです。ノア契約は、神がすべての生き物（9:15）、さらには「地」との間（9:13）に立てられた契約で、「大洪水が再び起こって地を滅ぼすようなことはない」ことを保証しています。この契約は被造世界の存続を保証する枠組みであり、後に展開されていくすべての契約の土台といえるものです[35]。神はこれから被造世界に、特に不信仰な世に対して御怒りを下されますが、それは被造世界を滅ぼすためではありません。神はご自分がお造りになった被造世界を存続させ、さらには本来の「非常に良かった」状態に回復させるために、悪に対するさばきを下そうとしておられるのです。

確かに、神のさばきというモチーフは、一部の注解者が指摘しているように、この時点ではまだ見出されません[36]。しかし、ヨハネはすべての啓示を与えられた（幻を見せられた）後に、自らの聖書知識と文章力を活かして黙示録を執筆しました。よって、彼が特にエゼキエル書のモチーフを、その本来の文脈に沿って持ち出し、自分が見た父なる神の栄光を描くために用いていることは大いにあり得ると考えられます。

聖書、特に象徴的表現を含む預言書を解釈する場合には、「木を見て森を見ず」という姿勢は不適切であり、かといって「森を見て木を見ず」という姿勢も不十分です。黙示録の解釈においては、「森を見て、木を見る」という姿勢が重要だといえるのではないでしょうか。

---

[34] 参照：Thomas, *Revelation 1–7*, 342–43.

[35] 参照：R. E. Averbeck, “Isarel, the Jewish People, and God's Covenants,” in *Israel, the Church, and the Middle East*, eds. D. L. Bock and M. Glaser (Grand Rapids: Kregel, 2018), 23–24.

[36] 例：Osborne, *Revelation*, 228; Fanning, *Revelation*, 199 n. 21.

当時の読者が朗読によって啓示を受け取ったことからしても、まず重要なのは全体像（森）を見ることです。本節の場合、それはヨハネが描いている神の栄光をイメージすることです。その後、私たちは啓示の一言一句（木）を神のことばとして大切にし、考察していくこともできます。本節の場合には、エゼキエル書との類似や後の文脈を踏まえることで、特にさばき主なる神のイメージが強調されていると考えるのが妥当でしょう。

３．24 人の長老たち（4:4）

4 章 4 節

父なる神がおられる御座の次にヨハネが描くのは、「御座の周り」にある「二十四の座」と、そこに座る「二十四人の長老たち」です（4 節 a–b）。「周りに」と訳されているのは、3 節 b で「虹」が御座の周りにあったことを表していたものと同じ語（ククロセン）です。栄光に輝く御座を 24 の座が取り囲んでいた様子が描かれています。それらの座に座っている 24 人の「長老たち」（プレスビュテロウス πρεσβυτέρους）は「白い衣をまとい、頭に金の冠をかぶっ」ていました（4 節 c）。

特に本章の残りの部分は、以下のようにキアズムによる対照的な構成になっています[37]。

- 長老たちの記述（4–6 節 a）
  - 四つの生き物の記述（6b–8 節 a）
  - 四つの生き物の賛美（8 節 b）
- 長老たちの賛美（9–11 節）

長老たちは 5 章以降も、11:16 を除いて必ず「四つの生き物」とセットで登場しています（5:5−14; 7:11−14; 14:3; 19:4）。そして、両者がセットで登場する場合の文脈は「礼拝」です。また、長老たちは啓示の解説（5:5; 7:13–14）という天使的な役割も担っています。

24 人の長老たちは、その描かれ方からすると一見、天使的な存在（angelic being）であるように思われます。しかし、彼らがどのような存在かは、黙示録において最も論争が交わされている問題のひとつとなっています。

ある注解者は、長老たちは天使（または天使的存在）だと考えています[38]。一方で、彼ら

[37] Osborne, *Revelation*, 228.
[38] 例：Ladd, *Commentary*, 73−75; Morris, *Revelation*, 89−90; Thomas, *Revelation 1−7*, 344−49; Osborne, *Revelation*, 228−30; Johnson, “Revelation,” 641−42; Green, “Revelation,” 2007; Fanning, *Revelation*, 199−201.

は旧新約すべての神の民である[39]、または特に新約の神の民（教会）であると考えている注解者もいます[40]。よって、長老たちに関する解釈は大きく「天使説」と「人間説」に分かれるといって良いでしょう。両者の主な根拠は以下のとおりです。

1. 天使説
   (1) 「長老の一人」が 5:5 ではヨハネに啓示を与え、7:13–14 ではヨハネが見た幻を解説する役割を担っている。他の箇所では、そういった解説者としての役割は天使に与えられている（10:8–11; 17:1）[41]。
   (2) ヨハネは 7:14 で長老に「私の主よ」と呼びかけている。このような呼びかけの対象としては、贖われた人間よりも超自然的な存在の方がふさわしい[42]。
   (3) 19:4–10 では長老たちとキリストの花嫁（教会）が区別されているようである[43]。
   (4) 詩篇 89:7 では天の御使いたちが「聖なる者の会合」と呼ばれている[44]（参照：I 列 22:19）。七十人訳のイザヤ 24:23 では同じ会合（天使たち）が「長老」（プレスビュテロス πρεσβύτερος）と呼ばれている[45]。
   (5) 「長老」は特定の地位の呼び名であるため、天使にも用いられ得る[46]。
   (6) ヨハネ文書では天使が「白い衣」を着ている[47]（ヨハ 20:12; 参照：マタ 28:3; 使 1:10）。
   (7) コロサイ 1:16 では天使たちが「王座」、「主権」、「支配」、「権威」と呼ばれている（参照：エペ 3:10; 6:12）。「金の冠」は長老たちに神から与えられている権威を表している[48]。また、黙示録では、堕落した御使いが「金の冠」をかぶっている[49]（9:7）。天の御使いもその冠をかぶっていてもおかしくない。
   (8) 24 という数字は神殿礼拝と賛美のために奉仕する 24 組の祭司（I 歴 24:4–5）と 24 組のレビ人（I 歴 25:1–31）を思い起こさせる。彼らのように、24 人の長老は天の礼拝で重要な役割を果している。天使たちは神の御前で聖徒たちを代表し

---

[39] 例：岡山『黙示録注解』131–32 頁。Beale (*Revelation*, 322)はすべての聖徒を象徴する天使的存在として解釈している。
[40] 例：Walvoord, *Revelation*, Kindle locations 1610–31, 1796–814; Patterson, *Revelation*, 151–52, 169–74; Garland, *Testimony*, 1:290–92, 312–15; Fruchtenbaum, *The Footsteps of the Messiah*, 164–65; Hitchcock, *101 Answers*, 112–14; 中川『黙示録』29–30 頁。
[41] Osborne, *Revelation*, 229; Green, “Revelation,” 2007.
[42] Ibid.
[43] Ibid.; Osborne, *Revelation*, 229.
[44] Ibid.
[45] Thomas, *Revelation 1–7*, 345.
[46] Ibid.
[47] Green, “Revelation,” 2007.
[48] Osborne, *Revelation*, 229.
[49] Green, “Revelation,” 2007.

て祈りと賛美を献げているため、その役割と 24 という数字の意義が調和している[50]。

2. 人間説
   (1) 黙示録において「長老」（プレスビュテロス）が天使を指す用例はない[51]。聖書全体についても同じことがいえる。イザヤ 24:23 の「長老たち」は、文脈からメシアの王国で指導的役割を演じる聖徒たちのことだと考えられる[52]。
   (2) 黙示録で「白い衣」を与えられるのは天使ではなく聖徒たちである[53]（3:4–5, 18; 6:11; 7:13–14）。
   (3) 黙示録で「金の冠」をかぶった天使は登場しない[54]。旧約で「金の冠」は大祭司（ゼカ 6:11）と王（詩 21:3）に与えられるものである。「金の冠」は王または祭司とされた人々に与えられるため、それを持つ 24 人の長老は天使ではなく贖われた聖徒である[55]（参照：1:6; 5:10）。
   (4) 黙示録 5:9「あなたの血によって人々を神のために贖い」は、King James Version や New King James Version の「あなたの血によって私たちを神のために贖い」が正しい読み方である。これを歌っている中には長老たちが含まれているため、彼らは天使ではあり得ない[56]。（なお、5:9–10 の読み方については当該節講解ノートで扱う予定）
   (5) 24 という数字はイスラエルの 12 部族の数字（黙 21:12）と 12 使徒の数字（21:14）を足し合わせたものである。よって、この数字はすべての時代の聖徒たちを表している[57]。
   (6) あるいは、24 という数字は礼拝と賛美における 24 組の祭司（I 歴 24:1–8）と 24 組のレビ人（I 歴 25:1–31）を思い起こさせる。彼らのように、24 人の長老たちは天の礼拝で重要な役割を担っている。よって、彼らは「礼拝を導く人間的な存在」である[58]。

---

[50] Osborne, *Revelation*, 229–30.
[51] 岡山『黙示録注解』131 頁。
[52] Garland, *Testimony*, 1:298 n. 23.
[53] 岡山『黙示録注解』131–32 頁。
[54] 前掲書、132 頁。
[55] 同上; Garland, *Testimony*, 1:292.
[56] Ibid., 1:313–15; Patterson, *Revelation*, 169–74; John Niemelä, “Revelation 5, the Twenty-Four Elders, and the Rapture,” Pre-Trib Research Center.
[57] 岡山『黙示録注解』132 頁。
[58] 同上; Fruchtenbaum, *The Footsteps of the Messiah*, 165; Garland, *Testimony*, 1:291; 中川『黙示録』29 頁。

上記の 2 つの見解は、どちらにも一定の説得力がありますが、同時にどちらも決め手に欠けているという印象を受けます。まず、長老たちが明らかに天使的な存在である 4 つの生き物とセットで登場しており、啓示を解き明かすという天使的な役割も成しているところからすると、天使説に説得力があるように思われます。また、6b–8 節 a の「四つの生き物」は実際に「四つ」の存在であり、彼らと長老たちの周りにいる「多くの御使いたち」の数は「万の数千倍、千の数千倍であった」と言われています（5:11）。よって、長老たちの「24」という数字も単なる象徴ではなく、実際の数字であったと考えた方が良いかもしれません。そのように解釈する場合、彼らを「聖徒たち全体」ではなく実際に 24 人の存在――もしかすると、通常の「御使いたち」よりも位の高い天使的存在――だと考えた方が適切です。

しかしながら、人間説の支持者がいうように、聖書で天使が「長老」と呼ばれている用例はありません。また、直前の黙示録 2–3 章において「白い衣」や「冠」は信仰者に与えられるものとして言及されていました（2:10; 3:4–5, 18）。特に「白い衣」は、黙示録を通して信仰者と関連づけられている重要なモチーフのひとつです（6:11; 7:19, 13–14; 19:7–8, 14; 22:14）。よって、黙示録自体の文脈では、長老たちは聖徒たちであるようにも思われます。このような理由から、筆者としては断定が困難だと感じつつも、人間説に傾いているところです。

それでは、仮に人間説が正しいとすれば、長老たちはどのようなグループを表しているのでしょうか。ひとつの可能性は、彼らがイスラエル 12 部族と 12 使徒を合わせた旧新約すべての神の民を表しているとするものです。しかし、聖書では 12 と 12 を足し合わせて 24 という数字が強調されている例はありません。12 部族と 12 使徒が合わせて言及されている黙示録 21:12 でも、両者は区別されています。よって、24 という数字そのものは、歴代誌第一の 24 組の祭司または 24 組のレビ人たちに関連していると考えた方が良いでしょう。

また、黙示録 4–5 章全体では地上に御怒りが注がれる直前の様子が描かれています。イスラエルが民族として回復または完成させられるのは、御怒りが注がれる患難期の最後、再臨のメシアによって王国が設立される時です（例：エレ 30:7–9; ダニ 7:25–27; 9:24–27; 12:1–2; ゼカ 12–14; ロマ 11:26–27）。4 章の時点でイスラエルの完成が将来だとすると、「すべての神の民」説よりは「教会」説の方がふさわしいように思われます[59]。もちろん、教会はユダヤ人と異邦人から成る「新しい一人の人」であるため（エペ 2:11–22）、ユダヤ人が含まれていないということではありません。しかし、24 人の長老たちが表しているのは「教会」という神の民だと考えることができます。

患難期前携挙説（3:10b–d 講解ノート参照）が正しければ、イエス・キリストのからだである教会は、患難期が来る前に復活した状態で天に引き上げられています（I テサ 4:17）。

[59] Garland, *Testimony*, 1:291.

4–5 章は患難期の直前の天における様子を扱っているので、長老たちが何らかのグループの聖徒たちであるならば、教会であるという解釈は文脈的に調和しています。

また、24 人という数字が第一神殿で奉仕していた祭司やレビ人たちと関係しているならば、教会がイエスによって神に仕える「祭司」とされたという黙示録の教えと調和しています（1:5; 5:10）。

さらに、彼らが与えられている「冠」（ステファノウス στεφάνους）は、黙示録でも書簡でも、信仰者に与えられる報賞を象徴するために使われています[60]（2:10; 3:11; I コリ 9:25; I テサ 2:19; II テモ 4:8; ヤコ 1:12; I ペテ 5:4）。教会の聖徒に報いが与えられる「キリストのさばきの座」はイエスの再臨と結びつけられているので、携挙と関連する出来事である可能性があります（3:3c–e 講解ノート参照）。よって、「冠」を既に与えられている長老たちが、携挙とさばきの座を経た教会の聖徒たちであることは十分に考えられるでしょう。

しかしながら、24 人の長老たちと患難期前携挙説の関係については注意すべき点があります。患難期前携挙説を支持する人の多くは、24 人の長老たちが携挙された教会の聖徒たちだと考えています。一部の注解者は、24 人の長老たちそのものが患難期前携挙説の根拠のひとつであると述べています[61]。また、ある注解者は「御座の回りにすわっている 24 人の長老をどのように解釈するかで、その人の終末論が大きく変わってきます」とまで述べています[62]。

確かに、文脈だけから 24 人の長老たちが教会の聖徒たちだと断定できれば、この場面は封印のさばきが下される前であるため、患難期前携挙説が支持されることになります。しかし、先ほど筆者が長老たち＝教会の可能性を論じたように、この見解はむしろ患難期前携挙説に基づいて展開した方が説得力があるように思われます。患難期前携挙説自体は主にテサロニケ書簡から導き出される見解であり[63]、すなわち黙示録よりも先行する啓示に基づく終末論だといえます。よって、先行する啓示に基づいて解釈するという伝統的な解釈論からすると、携挙に関する見解を踏まえた上で 24 人の長老たちについて論じる方が適切です。

また、24 人の長老たちが天使（的存在）だとしても、患難期中または後携挙説は必然の結論ではなく、前携挙説が否定されることにもなりません。もし 24 人の長老たちが天使であれば、単に 4 章では聖徒たちへの直接の言及がないというだけです。そして、患難期前携挙説を明確に支持しながら、24 人の長老は天使であると結論づけている神学者もいます[64]。

---

[60] R. G. Gromacki, “Revelation, Twenty-Four Elders of,” in *Dictionary of Premillennial Theology*, ed. M. Couch (Grand Rapids: Kregel, 1996), 378.
[61] Fruchtenbaum, *The Footsteps of the Messiah*, 165; Garland, *Testimony*, 1:292.
[62] 中川『黙示録』29 頁。
[63] C. A. Blaising, “A Case for the Pretribulation Rapture,” in *Three Views on the Rapture*, ed. A. Hultberg (Grand Rapids: Zondervan, 2010), 68–69.
[64] たとえば Robert Thomas（元マスターズ神学校教授）、Keith Essex（マスターズ神学校准教授）、Daniel Green

したがって、患難期前携挙説そのものは、黙示録 4:4 から導かれる終末論ではないのです[65]。

繰り返しますが、24 人の長老たちをめぐる諸見解は一長一短であり、「完全に受け入れられる解決法は見当たらない」のが実際のところです[66]。よって、ここでは彼らが教会の聖徒たちであるという可能性を論じつつ、彼らのアイデンティティを断定することは控えたいと思います。彼らが天使であろうと贖われた聖徒であろうと、今後の黙示録の全体的解釈に及ぼす影響は大きくありません。

４．御座の前の様子（4:5–6a）

4 章 5 節

ここで、ヨハネは再び神の御座そのものに目を向け、それから「御座の前」の様子を描きます。まず、「御座から」（エク・トウ・スロノウ ἐκ τοῦ θρόνου）「稲妻がひらめき、声と雷鳴がとどろいて」いました（5 節 a）。ここでは御座そのものから稲妻がひらめいている様子が描かれており、その現象が「神ご自身のわざによる」ものであることが示されています[67]。

「稲妻」（アストラパイ ἀστραπαὶ）は雷の閃光そのものを表しています[68]。「声」（フォーナイ φωναὶ）と「雷鳴」（ブロンタイ βρονταί）は重複しているように思われますが、前者は雷鳴と一緒に「暴風の轟音」が聞こえたことを表しているのかもしれません[69]。

3 節で言及したエゼキエル 1 章での御座の幻では、「四つの生きもの」から「稲妻が出ていた」と言われています（エゼ 1:13）。より本節と近い（すなわち、神ご自身と稲妻が関係している）描写は、モーセ契約が締結され、律法が付与されるという文脈にある出エジプト 19:16 で見られます。

> 三日目の朝、雷鳴と稲妻と厚い雲が山の上にあって、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。（出 19:16）

ヨハネはここで、シナイ山でイスラエルに顕された神の栄光を目撃したことを、出エジプト記のイメージを用いて描いているのでしょう。

（ムーディ神学校非常勤教授）、Buist Fanning（ダラス神学校教授）など。

[65] 参照：K. H. Essex, “The Rapture and the Book of Revelation,” *The Master’s Seminary Journal* 13/2 (Fall 2002): 228–29.

[66] Ibid., 228.

[67] Osborne, *Revelation*, 230.

[68] BDAG, 146.

[69] Ibid., 1071.

また、目に見える神の顕現が雷を用いて表されている場合、多くは神のさばきと関係しています[70]（例：士 5:4–5; I サム 7:10; 12:17–18; 詩 18:7–15; 77:17–18; 97:4）。黙示録の場合は、特にそれが顕著です。稲妻・声・雷鳴のセットは、第七の封印が開かれた場面（8:5）、第七のラッパが吹かれた場面（11:19）、そして第七の鉢が注がれた場面（16:18）でそれぞれ登場しています。神のさばきを表す現象が、ここで「御座から」出ていたと言われているのです。今後 6 章から描かれていく激しいさばきの源は、天の御座におられる神ご自身です[71]。私たちはここで、美しい天の様子に圧倒されつつも、神が厳粛なさばきを地に下そうとしておられることを知るのです。

御座から稲妻が出ているその「前」では、「火のついた七つのともしびが燃えて」いました（5 節 b）。「七つのともしび［ランパデス λαμπάδες］」は 7 つの教会を表していた 7 つの「燭台」（ルクニアス λυχνίας）を思い起こさせますが、使われている語は「燭台」ではなく、ランプやたいまつを表すランパス（λαμπάς）です[72]。ここではその「ともしび」が「燃えていた」（カイオメナイ καιόμεναι）と言われています。黙示録では同じ動詞が「火の燃えている大きな山のようなもの」（8:8）、「たいまつのように燃えている大きな星」（8:10）、そして「硫黄の燃える火の池」（19:20; 21:8）に使われているので、ここでは静かに燃えるランプではなく、激しく燃えるたいまつがイメージされているものと考えられます。

さらに、ヨハネは「七つのともしび」が「神の七つの御霊である」と明言しています（5 節 c）。「七つの御霊」は、1:4 に出て来た表現で、聖霊の完ぺきさを示すものです。ここでのたいまつによる「七つの御霊」の描写の背後には、全能かつ偏在の神の働きを「七つのともしび皿」で表していたゼカリヤ 4:1–10 があるのでしょう（1:4b–5a 講解ノート参照）。

注目すべきは、この描写が稲妻・声・雷鳴によって神のさばきが示唆された直後に置かれていることです。ゼカリヤ 4:1–10 のイメージ、また次に聖霊が「全地に遣わされた神の七つの御霊」として言及されている黙示録 5:6 のイメージを踏まえると、ここでは聖霊が、さばきの遂行者として（特に地上の監視者として）完ぺきな働きをされることが示唆されているのでしょう[73]。「燃えていた」という激しい描写は、これから三位一体の神によって下されるさばきの大きさを予感させます[74]。

4 章 6 節 a

ヨハネの視点は、御座そのもの（5 節 a）から御座の前（5 節 b–c）へ、そして御座の前の

[70] Osborne, *Revelation*, 230; Fanning, *Revelation*, 201.
[71] 参照：Beale, *Revelation*, 326.
[72] BDAG, 585.
[73] Osborne, *Revelation*, 231.
[74] Thomas, *Revelation 1–7*, 350–51.

土台へと移っていきます。そこは「水晶に似た、ガラスの海のよう」でした（6 節 a）。当時のガラスの透明度は、それほど高くありませんでした[75]。しかし、ここでは「水晶に似た」とあるので、現在のガラスでイメージされるような透明さが示されています。これまで宝石の輝きや稲妻、たいまつなどの光が強調されていたので、ヨハネが見た「ガラスの海のよう」に広がっていた御座の前の足下は、ガラスや水晶が光を反射するように、きらびやかに輝いていたのでしょう。

この様子もまた、エゼキエル 1 章における天の描写を思い起こさせます。

> 生きものの頭上には、まばゆい水晶のような大空に似たものがあり、頭上高く広がっていた。（エゼ 1:22）

ヨハネが御座からその足下へ視点を移したのに対して、エゼキエルはそれを見上げているイメージです。下から見れば、御座の周りには「まばゆい水晶のような大空に似たものがあり、頭上高く広がっていた」ように見えたのでしょう。また、黙示録ではこの後「四つの生き物」の記述に入りますが、エゼキエルが見た光景も「四つの生きもの」に関する記述の中に含まれています。

そして、エゼキエルもヨハネも、彼らの記述の土台には出エジプト 24:9–10 があったものと考えられます。

> 9 それからモーセとアロン、 ナダブとアビフ、 それにイスラエルの長老七十人は登
> って行った。10 彼らはイスラエルの神を見た。御足の下にはサファイアの敷石のよう
> なものがあり、透き通っていて大空そのもののようであった。（出 24:9–10）

黙示録や出エジプト記の記述から見えてくるのは、神の「御足の下」に大空や海のように広がっている透き通った場が広がっているというイメージです。おそらく、ヨハネが見た「二十四の座」は、その場の周りにあったのでしょう。彼は 15 章でも、天における光景で「ガラスの海のようなもの」とその「ほとり」に立っている聖徒たちの姿を見ています。

> 私は、火が混じった、ガラスの海のようなものを見た。獣とその像とその名を示す数字に打ち勝った人々が、神の竪琴を手にしてガラスの海のほとりに立っていた。（黙 15:2）

---

[75] *NIV Cultural Backgrounds Study Bible*, 2229.

6 節 b からはその海の上で、御座の周りに「四つの生き物」がいる様子が描かれます。しかし、御座を取り囲んで礼拝する 24 人の長老たちは、海の周りに座しています。ここから、神の御座が水晶やサファイアのように透明で輝く空間で隔てられているというイメージが得られます。よって、輝いているという面では神の栄光の輝きが表されており、隔てる空間という面では神が聖なる方であることを表しているのでしょう[76]。

また、一部の注解者は、御座の前に海のようなものがあるというイメージには幕屋や神殿の構造が反映されていると指摘しています[77]。確かに、黙示録では天の光景が幕屋や神殿のイメージで語られています[78]（7:15; 11:19; 14:15, 17; 15:5–16:1; 16:17）。また、5 節 b の「七つのともしびが燃えていた」は、至聖所の前、聖所の中で 7 つの「純金の燭台」が灯されていたイメージを思い起こさせます[79]（出 25:31–40; 40:4, 24–25）。このように、もし 4 章の時点で御座の周りの描写に幕屋や神殿のイメージが込められているとすれば、御座の前に広がっている「海」のような空間の背景には、幕屋の中庭に置かれていた青銅の洗盤（出 30:17–21; 38:8）や神殿の中庭に置かれていた鋳物の「海」（I 列 7:23–25; II 歴 4:2–3）があったのでしょう。これらの洗盤や「海」は、祭司のきよめに用いられたものです。それを踏まえると、御座の前に広がっている海のような空間は、神のきよさを表していることになります。確かに、「聖」という概念には、けがれのないきよさが含まれています（3:7b 講解ノート参照）。

ただし、6 節 a で言及されている御座の前の空間と、幕屋や神殿の中庭に置かれていた洗盤や「海」の間には大きなイメージ的開きがあります。後者は水を入れた鉢のようなものですが、前者はあくまで「海のよう」に大きく広がる空間です。よって、本節の描写に神殿のイメージを読み込むのは行き過ぎであるように思われます。

さらに、ここでの「海」を 13:1 で獣が上って来る「海」と対比させて解釈する注解者もいます。

> この「海」は神の勝利と平和を象徴する。黙示録では「海」は「獣」の上ってくるところであり、荒れ狂う波によって人々を呑み込む闇の力を示している（13:1、21:1）。神によって闇の力は撃ち破られ、嵐は止み波は静まり、海はガラスのように穏やかである。この「ガラスの海」のほとりで、地上の戦いに勝利した人々が立琴を手に神を賛美する（15:2）。[80]

---

[76] Thomas, *Revelation 1–7*, 352–53; Osborne, *Revelation*, 231; 参照：明石清正「黙示録 4 章『天の御座』ロゴス・ミニストリー、6 頁<http://logos-ministries.org/new_b/rev4b.pdf>。
[77] 例：Fanning, *Revelation*, 202; Osborne, *Revelation*, 231; 岡山『黙示録注解』133 頁。
[78] *NIV Cultural Backgrounds Study Bible*, 2229.
[79] Fanning, *Revelation*, 202.
[80] 岡山『黙示録注解』133 頁。

確かに、本節の「ガラスの海のよう」という描写は、「悪のため池」である海のイメージを反転させたものであるのかもしれません[81]。しかし、本節では「海」はあくまで広がりを表現するために使われているため、13 章に見られるような海との関係を読み込む必要はないと思われます[82]。

他には、15:2–3 で「ガラスの海のようなもの」のほとりで聖徒たちが「神のしもべモーセの歌」を歌っていることから、ここにはエジプトの軍勢を呑み込んだ「葦の海」のイメージがあると主張する注解者もいます[83]（参照：出 14:16–15:21）。よって、ここでは終末における神の救いの完成が「新しい出エジプト」というモチーフで語られているというのです。「新しい出エジプト」は聖書の終末論における重要なモチーフです。既に示唆されていた神のさばきと、それを通して神のご計画が完成されるという 4–5 章の背景にある終末的期待とも調和します。よって、これは魅力的な解釈ではありますが、天の御座の前にある「ガラスの海のよう」な空間には「葦の海」のイメージがそれほど明確に表されているとはいえません。

以上のことから、ここで御座の前に広がっている空間は、神の栄光と、この方が完全にきよく他の被造物から隔てられているという「聖」を表しているのだと考えられます。

５．４つの生き物（4:6b–8a）

4 章 6 節 b

御座の前がガラスの海のように広がっていたという記述の後、ヨハネの視点は「御座のあたり、御座の周り」に移ります。ヨハネはそこに「四つの生き物」を見ました（6 節 b）。「御座のあたり」（メソー・トウ・スロノウ μέσῳ τοῦ θρόνου）は字義的に「御座の中央」（聖書協会共同訳、岡山訳[84]）と訳すことができます。しかし、御座には神が座しておられるはずなので、ここでは新改訳 2017 のように「御座のあたり」が示されているのでしょう[85]。または、「御座の中央」という表現によって御座を挟む前後が示されているか[86]、単純に「御座の両側」という意味が込められているのかもしれません[87]。

合わせて使われている「御座の周り」（ククロー・トウ・スロノウ κύκλῳ τοῦ θρόνου）という表現からは、御座を取り囲んでいるというイメージを読み取ることができます。よっ

[81] Johnson, “Revelation,” 642.
[82] 参照：Morris, *Revelation*, 91.
[83] Beale, *Revelation*, 327.
[84] 岡山『黙示録注解』32 頁。
[85] Thomas, *Revelation 1–7*, 354.
[86] Ibid.; Johnson, “Revelation,” 642.
[87] BDAG, 635.

て、「御座のあたり／中央／両側、御座の周りに、四つの生き物がいた」からは、「四つの生き物」が御座をぐるりと取り囲んでいる様子を想像すれば良いと考えられます。5 節からの流れを踏まえると、彼らは 24 人の長老たちよりも内側、すなわちより御座の近くにいたのでしょう。

「四つの生き物」（テッサラ・ゾーア τέσσαρα ζῷα）は、エゼキエル 1:5–25 に出て来る 4 つの「生きもの」（ハヨート חַיּוֹת）を思い起こさせます。実際に、七十人訳でエゼキエル 1 章の「生きもの」の訳語として使われているのは、ヨハネがここで用いているのと同じ名詞ゾーオン（ζῷον）です。これは植物を含まない生き物、すなわち「動物」を意味する語ですが[88]、13 章などに出て来る「獣」（テーリオン θηρίον）とは異なり、危険性やどう猛さを内包するものではありません[89]。

4 つの生き物は、4 節講解ノートで言及したように、多くの場合 24 人の長老たちと共に神に礼拝がささげられるという文脈で登場しています。また、6:1–7 では、第一から第四の封印のさばきを仲介するものとして出て来ます。3 節や 5 節で御座に着いておられる神からのさばきが示唆されていたように、ここで 4 つの生き物が紹介されていることは、6 章以降の具体的なさばきのセクションに向けた備えがされていると考えることができます。

4 つの生き物は「前もうしろも目で満ちた」と言われています（6 節 c）。この表現は、聖書協会共同訳では「前にも後ろにも一面に目があった」と訳されています。

エゼキエル 1:18 では、それぞれの生き物のそばにある「輪の周りの縁は一面、目で満ちていた」と言われています。しかし、10:1–22 ではこの生き物が「ケルビム」と呼ばれており、10:12 では「それらのからだ全体と、その背、その手、その翼」も「周りに目がたくさん付いていた」とされています。ヨハネは生き物に「輪」があったかどうかは記していませんが、「前もうしろも目で満ち」ていたという記述は、エゼキエルの「からだ全体」に「目がたくさん付いていた」という記述を単純化させたものなのでしょう。

「一面に目があった」という様は、現代の私たちにとってはグロテスクな印象を受けるものかもしれません。古代の人々の感覚でどのように想像されたかは、私たちには知る由もありません。しかし、この文脈ではヨハネが幻で見た光景の美しさや荘厳さが強調されてきているため、私たちもこれを何か美しいイメージとして受け取るのが良いでしょう。

黙示録で「目」が象徴的に使われている場合、イエスがさばき主としてすべてを見抜いておられることや（2:18）、イエスが全地に遣わされた御霊を持っておられること（5:6）を表しています。本節では、4 つの生き物の身体的特徴を表すために「目」が使われています。これは単に天にいる彼らの身体的特徴が記述されているだけとも考えられますが、神が何

[88] Ibid., 431.
[89] Fanning, *Revelation*, 202 n. 38.

らかの意義を象徴的に伝えるために、このような姿で 4 つの生き物をヨハネに見せられた可能性は否定できません。よって、イエスの「目」の場合と同じように、4 つの生き物が何らかの「知識」を持っていることが表現されている可能性は十分に考えられます。

4 つの生き物は、ヨハネが見た光景に登場する被造物の中では、最も御座の近くにいる存在です。そして、御父と御子が患難期に下される最初のさばきを仲介する重要な存在でもあります。彼らは神の御心について、豊かな知識を与えられた存在として創造されたのでしょう。特にここでは、神が下そうとしておられ、彼らが関与することになるさばきについて、十分な知識を持っていることが強調されているのだと思われます[90]。

4 章 7 節

4 つの生き物は、それぞれ「獅子のよう」、「雄牛のよう」、「人間のような顔を持ち」、「飛んでいる鷲のよう」だったと描写されています。エゼキエル 1:10 では、4 つの生き物がそれぞれ人間、獅子、牛、鷲の 4 つの顔を持っていたと記されています。

> 彼らの顔かたちは人間の顔で、四つとも右側には獅子の顔、四つとも左側には牛の顔、さらに四つとも鷲の顔を持っていた。（エゼ 1:10）

エゼキエルは動物の「顔」を強調しているのに対して、ヨハネは「顔」は人間にしか使っていません。よって、第三の生き物を除けば全体が獅子、雄牛または鷲のようだったと受け取ることができます[91]。しかし、エゼキエルの記述に基づくべきであれば、人間以外も顔の特徴が伝えられているということになります[92]。どちらが正しいかは定かではありません。

また、ヨハネの記述では生き物一体につき一体の動物と結びつけられており、言及されている動物の順番も異なっています。しかし、獅子（レオーン λέων）、雄牛（モスコス μόσχος）、人間（アンスローポス ἄνθρωπος）、鷲（アエトス ἀετός）はいずれもエゼキエル 1:10 の七十人訳で使われている語と一致しています。

これらの動物にどのような象徴的意義があるのかは、定かではありません。エイレナイオスやアウグスティヌスといった著名な教父の中には、それぞれの福音書との対応が見られると主張する人々がいました[93]。たとえば、エイレナイオスは福音書の数が 4 つより多くても少なくてもいけないことを説明する中で、4 つの生き物（ケルビム）と福音書の関係に言

---

[90] Thomas, *Revelation 1–7*, 358–59; Fanning, *Revelation*, 203.
[91] Osborne, *Revelation*, 233.
[92] Thomas, *Revelation 1–7*, 359.
[93] 参照：Ibid., 355; Osborne, *Revelation*, 233 n. 23.

及しています[94]。

1. 獅子は「その活動性を指導的、王的と性格づけている」のであり、栄光に満ちたキリストを描いているヨハネの福音書と対応している。
2. 雄牛は「犠牲的奉仕、祭司的な位」を表しており、祭司的性格を持つルカの福音書と対応している。
3. 人間は「人間に適わせたやり方での来臨の輪郭」が描かれていることを表しており、人として誕生したキリストを描いているマタイの福音書と対応している。
4. 鷲は賜物を与えるために聖霊が「教会に向かって飛んでくる」ことを表しており、預言の霊によって預言書を引用して書き始めたマルコの福音書と対応している。

また、現代の注解者にも、福音書との関係に言及する例が見られます。ある注解者は、次のような対応を指摘しています[95]。

1. 獅子：ユダ族の獅子である王なるキリストが描かれているマタイの福音書を表す。
2. 雄牛：主のしもべとしてキリストが描かれているマルコの福音書を表す。
3. 人間：イエスの人間性が強調されているルカの福音書を表す。
4. 鷲：至高の神の子としてキリストが描かれているヨハネの福音書を表す。

しかしながら、エゼキエル書でも黙示録 4 章でも福音書との関係は示唆されておらず、この解釈は釈義というよりも読み込みだといえます[96]。

ある注解者が「おそらく最も良い解釈」だとしているのは、4 つの動物が神の属性[97] を表しているというものです[98]。このような立場を取るある注解者によれば、4 つの動物はそれぞれ「王の権力、力強さ、霊性、わざの迅速さ」といった神のご性質を表しています[99]。しかし、そのような対応も黙示録の本文からは見出されません。さらに、4 つの生き物が神の属性を表しているならば彼らも礼拝の対象に含まれるべきですが、彼らはむしろ神を礼拝

---

[94] エイレナイオス『異端反駁』3.11.8。以下「」内は小林稔訳『エイレナイオス 3　異端反駁 III』（教文館、1999 年）44 頁からの引用である。

[95] Walvoord, *Revelation*, Kindle locations 1671–74; Garland, *Testimony*, 1:295, 2:271–78.

[96] Bullinger, *Commentary*, 154; Thomas, *Revelation 1–7*, 355; 岡山『黙示録注解』135–36 頁。

[97] 「神の属性」（attributes of God）とは、神の性質または特質のこと。J. MacArthur and R. Mayhue, eds., *Biblical Doctrine* (Wheaton, IL: Crossway, 2017), 925; ミラード・エリクソン『キリスト教神学』第 2 巻、安黒務訳、宇田進監修（いのちのことば社、2003 年）9–10 頁。

[98] Walvoord, *Revelation*, Kindle locations 1664–66.

[99] Johnson, “Revelation,” 642.

する存在です[100]。

おそらく、様々に推測されている中で最も本文と調和する見解は、4 つの生き物が神に創造された生き物全体を代表しているというものです[101]。4 つの生き物がささげている賛美（8 節 b）は、24 人の長老たちのよる創造主への礼拝という文脈の中に位置づけられています（10–11 節）。また、彼らはすべての被造物の賛美を「アーメン」と締め括る役割を担っています（5:14）。各動物の象徴的意義は様々な説明が考えられますが、たとえば獅子は野獣の王、雄牛は力強い動物、人間は知性と理性を持った存在、鷲は素早い存在といった風に[102]、それぞれが「被造物における力あるものの象徴」となっているのでしょう[103]。しかしながら、この見解もまた、断言できるほどの証拠が本文中に揃っているとは言えません[104]。

前節の講解ノートで述べたように、4 つの生き物は最も御座に近い被造物であるため、被造世界の代表として存在している可能性は大いに考えられます。しかし、ここで断定できるのは、4 つの生き物がエゼキエル書に登場するケルビムと関係しているということくらいです[105]。なお、彼らとケルビムおよびセラフィム（イザ 6:2–3）といった天使的存在との関係については、8 節 a 講解ノートの後でより詳しく扱います。

4 章 8 節 a

ヨハネが記している 4 つの生き物の最後の特徴は「それぞれ六つの翼があり、その周りと内側は目で満ちていた」というものです。目で満ちている翼を持っているのは、エゼキエル書に出て来るケルビムの特徴でもあります（エゼ 10:12）。しかし、ケルビムは「四つの翼を持っていた」と言われています（エゼ 1:6）。6 つの翼という特徴そのものは、むしろイザヤ 6:2–3 に出て来るセラフィムと一致します。

> [2] セラフィムがその上の方に立っていた。彼らにはそれぞれ六つの翼があり、二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでいて、[3] 互いにこう呼び交わしていた「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満ちる。」（イザ 6:2–3）

「周りと内側」（ククロセン・カイ・エソーセン κυκλόθεν καὶ ἔσωθεν）に目が満ちていたという描写は、新改訳および共同訳が「その」という語を補足しているとおり、翼に目が満

[100] Bullinger, *Commentary*, 154; Thomas, *Revelation 1–7*, 356; Osborne, *Revelation*, 234.
[101] Bullinger, *Commentary*, 155; Ladd, *Commentary*, 77; Thomas, *Revelation 1–7*, 359–60; Beale, *Revelation*, 329; Fanning, *Revelation*, 203; 岡山『黙示録注解』135 頁。
[102] Thomas, *Revelation 1–7*, 359–60.
[103] 岡山『黙示録注解』135 頁。
[104] Osborne, *Revelation*, 234.
[105] Ibid.

ちていたことを示しているのでしょう。ここで言われているのは、翼をぐるりと取り囲むように（ククロセン）目が満ちており、また翼の内側（エソーセン）にも目が満ちていたというイメージです。よって、この描写は翼の「表にも裏にも一面に目があった」（聖書協会共同訳）という意味になります。

ここでは 6 節 c の「前もうしろも目で満ちた」という記述が補足されているので、ヨハネが 4 つの生き物の描写で最も強調しているのは「目で満ちていた」ことだったと考えられます。彼らは神ご自身や神の御業に関する正しい知識を豊かに持っていたのです（6 節 b–c 講解ノート参照）。それは、彼らがささげる賛美の内容（8 節 b–d）にも、また最初のさばきを仲介する（6:1–7）という役割にも表されています。

4 つの生き物とケルビムおよびセラフィムの関係

これまで述べてきたとおり、ヨハネが見た 4 つの生き物の特徴は、大筋はエゼキエル書の「四つの生きもの＝ケルビム」の記述（1:5–25; 10:1–22）に基づいていますが、イザヤ書のセラフィム（6:2–3）の要素も含まれています。ここで、3 者の記述の比較を次頁の表に示します。なお、**太字**は黙示録の記述との対応を表しています。

セラフィム（שְׂרָפִים; 複数形セラフשָׂרָף）はイザヤ 6:2–3 にしか登場しませんが、ケルビム（כְּרוּבִים; 複数形ケルブ כְּרוּב）はかなり頻繁に登場します。

> 彼らは人間のように見え、翼をもち、彼らの上の御座に着いておられる神に、ある特別な方法で仕えるものとして、描かれている（民数 7：89、Ⅰサムエル 4：4、II サムエル 6：2、詩篇 80：1、99：1 他）。アダムとエバがエデンの園から追い出されたとき、神はいのちの木を守るために、ケルビムと炎の剣を置かれた（創世 3：24）。[106]

ケルビムおよびセラフィムは、天使を表す語である「御使い」と呼ばれていることはありません。しかし、一般的には「神ではないが、人間を超える存在」いう広い意味での「天使」に含まれる存在だと考えられています[107]。

---

[106] エリクソン『キリスト教神学』第 2 巻、224 頁。

[107] 前掲書、213、224–25 頁; 参照：W. A. Grudem, *Systematic Theology*, rev. ed. (Grand Rapids: Zondervan, 2000), 398; C. C. Ryrie, *Basic Theology*, rev. ed. (Chicago: Moody, 1999), 147.

表　4 つの生き物とケルビムおよびセラフィムとの対比[108]

カテゴリ	4 つの生き物（黙 4:6b–8a）	ケルビム（エゼ 1:5–25; 10:1–22）	セラフィム（イザ 6:2–3）
呼び名	**四つの生き物**（vv. 6, 8）	**生きもの**（1:5） ケルビム（10:1）	セラフィム（v. 2）
居場所	**御座のあたり、まわり**（v. 6）	**御座**の下（1:22, 26）	（天の）**神殿**（6:1）
目	**前とうしろ、（翼の）周りと内側に満ちていた**（vv. 6, 8）	**からだ全体**と輪に**目がたくさん付いていた**（10:12）	–
顔	**一つずつ** **獅子、雄牛、人間、鷲**（v. 7）	四つ（1:6） **人間、獅子、牛、鷲**（1:10） ケルビム、**人間、獅子、鷲**（10:14）	–
翼	**六つ**（v. 8）	四つ（1:6）	**六つ**（二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでいた）（v. 2）
姿	**獅子、雄牛、鷲のよう**（v. 7）？	人間のよう（1:5）	–
足	–	子牛のよう（1:7）	–
手	–	人のよう（1:8; 10:8, 21）	–
輪	–	そばに緑柱石のような輪がある（1:15–21; 10:9–13）	–
役割	**昼もよるも休みなく賛美をささげていた**（v. 8） **神のさばきを仲介**（6:1ff）	神の御座を支えている（1:22–26）	**賛美をささげ**（v. 3）、イザヤに罪の赦しを告げる（6:7）

彼らは天使の中でも高い地位にいる存在として、特にケルビムは最高位の天使として見なされていることもあります[109]。エゼキエル 28:12–19 の「ツロの王についての哀歌」がサタンの起源を表しているという伝統的な解釈[110] が正しければ、「守護者ケルビム」であった

[108] 本表は Patterson, *Revelation*, 155 および岡山『黙示録注解』134 頁の表を参考にした。

[109] 例：アーノルド・フルクテンバウム「天使論、サタン論、悪霊論」2010 年フルクテンバウムセミナーテキスト（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ、2010 年）10–12 頁。

[110] C. H. Dyer, “Ezekiel,” in *The Bible Knowledge Commentary: Old Testament*, eds. J. F. Walvoord and R. B. Zuck (Wheaton, IL: Victor, 1985), 1283. L. E. Cooper, Sr. (*Ezekiel* [Nashville, TN: B&H, 1994], 266–69)は、エゼキエルが第一義的に実際のツロの王について書いているとしながらも、王の背後にサタンの存在が示唆されてい

彼が「全きものの典型であった」と言われているため、ケルビムが被造物の中で最高位の存在だったと考えることはできるでしょう。しかしながら、天使の階級について、教理として体系化できるほどの情報は示されていません。そのような階級があるとしても、ケルビムやセラフィムが「高い階級にあるのか、低い階級にあるのかは不明である」という慎重な結論を下すべきだと思われます[111]。

さて、黙示録に登場する 4 つの生き物については、基本的にケルビムの描写に則っていながらも、翼の数や顔の数といった相違点があります。よって、注解者の中には、6 つという翼の数や賛美の内容（イザ 6:3; 黙 4:8b–d）に基づいて、むしろセラフィムと同一視する人々もいます[112]。一方で、彼らを明確にケルビムと同一視する注解者もいます[113]。そのうちの一人は、エゼキエルとヨハネの記述の違いについて（1）両者ともに自分が見た特徴から一部を記した、(2) 天使は霊的な存在であるためその時々によって見え方が異なる、という 2 通りの解決法を提示しています[114]。

4 つの生き物がケルビムなのか、セラフィムなのか、または両者とも異なる存在なのか、断定することはできません。しかし、ケルビムと一致する特徴が多いこと、また 1–6 節までの記述で多くの要素がエゼキエル 1 章と関係していることから、どちらかといえばケルビムである可能性の方が高いものと思われます。

ある注解者は、4 つの生き物は実際に天にいる存在ではなく、「単なる象徴的描写」に過ぎないと考えています[115]。しかしながら、旧約の特にケルビムに関する記述は、このような存在が実在することを示唆しています(例：創 3:24; 詩 80:1)。ヨハネが見たのは確かに「幻」ですが、それが実際の天の光景を反映しているという考えをはっきりと否定すべき根拠は考えられません（1 節講解ノート参照)。よって、「黙示録の 4 つの生き物も天使的な存在である」ことを受け入れるべきでしょう[116]。

ると解釈している。

[111] エリクソン『キリスト教神学』第 2 巻、225 頁。

[112] E. Hindson, *The Book of Revelation* (Chattanooga, TN: AMG, 2002), 59; Fruchtenbaum, *The Footsteps of the Messiah*, 166; 中川『黙示録』31 頁。

[113] Bullinger, *Commentary*, 154–55; Patterson, *Revelation*, 154–56.

[114] Ibid., 154.

[115] Beale, *Revelation*, 330–31.

[116] 岡山『黙示録注解』136 頁; 参照：Osborne, *Revelation*, 234–35.

６．天での礼拝（4:8b–11）

4 章 8 節 b–d

御座がある天の光景、そこに存在する者たちが紹介された後、彼らによる礼拝の様子が描かれていきます。

その礼拝は、直前に紹介されていた 4 つの生き物たちの賛美から始まります。「昼も夜も休みなく言い続けていた」（8 節 b）という表現が意味しているのは、4 つの生き物の行動が本節に記されている賛美をささげるだけだったということではありません。パウロはよく似た表現で「夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました」と言っています（I テサ 2:9; 参照：II テサ 3:8）。彼の場合、「夜も昼も働きながら」は、宣教の時間を除いて、常に働いていたことを表しています。

4 つの生き物もまた、8 節 c–d の賛美をささげるほかに、「新しい歌」の賛美（5:9–10）、被造世界全体の賛美に対する「アーメン」という応答（5:14）、さらには第一から第四の封印のさばきを仲介する（6:1–7）といった役割を与えられています。ここでの「昼も夜も休みなく言い続けていた」は、黙示録の文脈の中では、4 つの生き物が他の役割を担う時以外、常に 8 節 c–d の賛美をささげていたということを表しています[117]。

賛美の内容のうち「聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者」（8 節 c）は、セラフィムが天の神殿でささげていた賛美とほとんど同じ内容です。

> 互いにこう呼び交わしていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満ちる。（イザ 6:3）

3 連続の「聖なる」（ハギオス ἅγιος）は神が三位一体であることを表していると解釈されることもあります[118]。しかし、同じ言葉の 3 回繰り返しによる強調は、エレミヤ 22:29 の「地よ、地よ、地よ」やエゼキエル 21:27 の「廃虚、廃虚、廃虚」（聖書協会共同訳 21:32）でも見られるヘブライ的表現です。イザヤ 6:3 や黙示録 4:8c の「聖なる、聖なる、聖なる」は、神が「聖なる」方であること――他の何ものからも隔たった、きよい方であることを強調しています[119]（3:7b 講解ノート参照）。

イザヤ書の「万軍の【主】」は、黙示録では「主なる神、全能者」（キュリオス・ホ・セオス・ホ・パントクラトール κύριος ὁ θεὸς ὁ παντοκράτωρ）となっています。イザヤ 6:3 の七

---

[117] Thomas, *Revelation 1–7*, 361–62.
[118] Hindson, *Revelation*, 59; Patterson, *Revelation*, 156–57.
[119] Fanning, *Revelation*, 204.

十人訳では、「万軍の【主】」はキュリオス・サバオース（κύριος σαβαωθ）と、「万軍の」（ツェヴァオート צְבָאוֹת）を音訳した語が使われています。しかし、ヨハネが使っているパントクラトールもまた、七十人訳において主（キュリオス）との組み合わせで「万軍の【主】」の訳語として頻繁に使われているものです（1:8 講解ノート参照）。4 つの生き物による賛美では、御座に着いておられる方が聖なる方であり、神であり、力ある万軍の【主】であることが歌われているのです。

そして、この神が「昔おられ、今もおられ、やがて来られる方」でもあるという宣言によって賛美が締め括られます（8 節 c）。1:4 でも父なる神は「今おられ、昔おられ、やがて来られる方」と呼ばれていましたが、ここでは「今おられ」と「昔おられ」の順番が入れ替えられています。4 章での賛美は神の創造の御業をほめたたえることで締め括られていますので（11 節）、ここでは神が「昔」から存在しておられ、最初からこの被造世界を支配してこられた方であることに強調が置かれているのでしょう[120]。

また、1:4 でも言われていたとおり、神は「やがて来られる方」でもあります。これから焦点が当てられていく被造世界は、御父ご自身が「来られる」新しい天と新しい地において最終的な回復を経験することになります[121]。

4 章 9–10 節

礼拝の様子は、4 つの生き物の賛美から 24 人の長老たちの賛美へと移っていきます。

4 つの生き物による礼拝は、「栄光と誉れと感謝を、御座に着いて世々限りなく生きておられる方にささげる」ものでした（9 節）。9 節 b と 10 節 b では、神が「世々限りなく生きておられる方」と表現されています。これは、神が永遠の存在であることを強調する表現で、「昔おられ、今もおられ、やがて来られる方」（8 節 c）を言い換えたものだといえます。

その方に、4 つの生き物は「栄光と誉れと感謝を……ささげ」ていました（9 節 a）。「ささげる」（ドーソウシン δώσουσιν）は字義的には「与える」と訳すことができます。しかし、ここでは、少なくとも「栄光と誉れ」に関しては「帰する」（例：詩 29:1–2）という意味で理解した方が良いでしょう[122]。被造物は、神に栄光を「与える」ことはできません。できることは、神の栄光を認識し、ほめたたえ、感謝をささげることだけです[123]（「栄光を帰する」ことについて、詳しくは 11 節講解ノートを参照してください）。

「栄光」と訳されている名詞ドクサ（δόξα）は、七十人訳では多くの場合、「栄光」を表

---

[120] Thomas, *Revelation 1–7*, 363.
[121] Ibid.
[122] 岡山『黙示録注解』137 頁。
[123] Fanning, *Revelation*, 204.

すヘブライ語の一つカボード（כָּבוֹד）の訳語として使われています。カボードは基本的に「重さ」や「名誉」、「大切さ」を表す語ですが[124]、神に対して使われる場合には、より豊かな（神学的）意味を持っています。旧約において、神の栄光は視覚的にわかる「栄誉と力のオーラ」や「統治のオーラ」のような形で表されていることもあります[125]（例：エゼ 10:18–19）。しかし、それは栄光という概念の一面でしかありません。むしろ、神の栄光を端的に言い表すことは不可能です。神の栄光については、神の「栄誉、尊厳、比類なき力」[126]、または「神の尊厳、卓越性、完全性などのすべて」[127] といったように、不完全な形でしか表現することができません。すなわち、私たちが言い表すことのできない神という方の素晴らしさすべてを詰め込んだ語が「栄光」なのです。

次の「誉れ」（基本形ティメー τιμή）は尊敬や栄誉を受けることを意味しています[128]。すなわち、神は栄光ある方であるがゆえに、ほめたたえられるべき方であるということが表されています。

そして、神はそのような方であるがゆえに、被造物から「感謝」（基本形ユーカリスタ εὐχαριστία）を受けるべき方もあります。4 つの生き物の賛美の内容は、神の栄光をほめたたえるものでした。その賛美は、神への「感謝」も込められていたのです。これは、栄光と誉れから連続していることから、何か特定の御業や祝福への感謝というよりも、すべてに対する感謝だと考えた方が良いでしょう。永遠の神が存在しておられること、栄光の神がおられること、このような方が神であること、このような方が万物を創造されたこと、そしてこのような方がお与えになる祝福すべて——4 つの生き物が神をほめたたてささげた賛美には、この方に属するすべてへの感謝が込められていたのです。

4 つの生き物の礼拝には、4 節で紹介されていた 24 人の長老たちも加わっていました（10 節 a–b）。9 節 a の生き物たちが賛美をささげている「とき」（ホタン ὅταν）は、彼らが賛美をささげる「度に」（聖書協会共同訳）、またはその「ときはいつでも」という意味合いを持っています[129]。長老たちはその度に、御座に着いておられる永遠の神の御前に「ひれ伏して」（ペソウンタイ πεσοῦνται）いました。ここで使われている語には「倒れる」という意味があります[130]（参照：1:17）。岡山訳の「倒れ伏す」[131]は、動詞のダイナミックさと礼拝のニュ

---

124 *HALOT*, 2:457.
125 W・ブルッゲマン『旧約聖書神学用語辞典』小友聡・左近豊監訳（日本キリスト教団出版局、2015 年）56–59 頁。
126 前掲書、56 頁。
127 新聖書辞典「栄光」。
128 BDAG, 1005.
129 Ibid., 730.
130 Ibid., 815.
131 岡山『黙示録注解』33 頁。

アンスの両方が込められた適切な訳だといえるでしょう。

そして、「礼拝した」（プロスクネーソウシン προσκυνήσουσιν）もまた、服従や礼拝のために「ひれ伏す」ことを意味する語です[132]。黙示録ではすべての場合において、何らかの存在を礼拝する行為を指して使われています（3:9 講解ノート参照）。

長老たちの礼拝のダイナミックさは「自分たちの冠を御座の前に投げ出して」という行為にも表れています（10 節 c）。

ここでの「冠」（ステファノウス）は、彼らがかぶっていると言われていた「金の冠」だと考えられます（4 節）。ステファノス（στέφανος）が信仰者に対して使われるときは、勝利者に報賞として与えられる冠を意味しています（2:10 講解ノート参照）。しかし、語としては王の冠を意味することもあります[133]（例：マタ 27:29; ヨハ 19:2）。長老たちの冠が報賞として与えられたものか、それとも王権を表すものかは、彼らのアイデンティティ（天使か聖徒か）が断定されない限り、定かではありません。しかし、報賞であるにしろ王権であるにしろ、被造物にとっては、それは神から与えられた祝福であり、栄誉です。

彼らは礼拝の中で、自らの冠を「投げ出して」（バロウシン βαλοῦσιν）います。この動詞は、基本的には「投げる」という力強いニュアンスを含む語ですが、文脈によっては単に「置く」を意味することもあります[134]。New International Version や New Living Translation は「置く」を訳語として採用しています[135]。確かに、実際の行為は「置く」と表現できるものだったのかもしれませんが、「投げ出す」の方が 10 節 a の「倒れ伏す」という語の持つ動きのダイナミックさと調和しています[136]。

本節で、「投げ出して」と「言った」（レゴンテス λέγοντες）の 2 つの動詞はどちらも現在時制です。長老たちの礼拝は 4 つの生き物が賛美する度にささげられていた（9 節）ことから、反復や習慣を表す動作の継続が示されているものと考えられます。繰り返しささげられる礼拝の中には、常に「冠を投げ出すという行為も含まれて」いたのです[137]。

古代の文献には、従順を示すものとして冠を相手の足下に置くという行為が記録されているものがあります[138]。長老たちは創造主なる神の主権を認め、冠を脱ぎ、神の御前に投げ出したのでしょう。また、この行為は、自分たちの持っている栄誉が神から与えられたものだということを表すものでもあったのかもしれません。4 つの生き物が賛美によって神に栄光を帰していたように、長老たちはそれを具体的な行為でも表していたのです。

---

[132] BDAG, 882–83.
[133] Ibid., 943.
[134] Ibid., 163.
[135] 参照：Fanning, *Revelation*, 205 n. 61.
[136] Patterson, *Revelation*, 160.
[137] 中川『黙示録』31 頁。
[138] Fanning, *Revelation*, 205 n. 62.

4 章 11 節

本節には長老たちが礼拝の中でささげていた賛美が記されています。彼らは「主よ、私たちの神よ」と呼びかけ、まず「あなたこそ栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方」と賛美しています（11 節 a）。ここでは、9 節の「感謝」が「力」（デュナミン δύναμιν）に置き換えられています。これはおそらく、長老たちの賛美では神の創造の御業に強調が置かれているためでしょう[139]。

神が「栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方」であるということは、神に足りないものがあるということを表しているのではありません。9 節の「栄光と誉れと感謝をささげる」と同様に、神こそが栄光の神であり、栄誉を受けるべき方であり、力ある神であることがほめたたえられているのです。

神には、足りないものは何もありません。むしろ、「神ご自身がすべての人に、いのちと息と万物を与えておられるのです」（使 17:25）。詩篇 50:7–12 で歌われているとおり、たとえ神が飢えるようなことがあっても、それを被造世界に告げ知らせる必要はありません。なぜなら、すべてが神ご自身のものだからです。また、ヤコブも次のように教えています。

> すべての良い贈り物、またすべての完全な賜物は、上からのものであり、光を造られた父から下って来るのです。父には、移り変わりや、天体の運行によって生じる影のようなものはありません。（ヤコ 1:17）

すなわち、パウロが賛美したように、「すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです」（ロマ 11:36）。

そのような方に対して「栄光を帰する」とは、簡潔に言えば、神がどのような方であるかをほめたたえるということです。その中には、賛美や礼拝とともに、私たちが行いにおいて「神の栄光を反映」することも含まれます。「私たちがことばや行いで神の栄光ある性格やわざを示す時、私たちは神に栄光を帰すことになるのです。イエスの性格を真似するのも神に栄光を帰す方法です。なぜなら私たちは神の性質を陳列することになるからです。神に栄光を帰す時、私たちは神に栄誉をもたらしているのです。」[140]

しかし、神がご自分においてすべてを満たしておられる方であるならば、なぜ被造物が神をほめたたえる必要があるのでしょうか。ある神学者は、この問いに対する答えを、次のように要約しています。

---

[139] Thomas, *Revelation 1–7*, 367.

[140] GotQuestions 日本語版「神に栄誉を帰すとはどういう意味ですか？」<https://www.gotquestions.org/Japanese/Japanese-honor-God.html>

（1）神に栄光を帰すことは、私たちの**最高の務め**である。なぜなら、**この方においてのみ**無限の完ぺきさが満ちているからである（イザ 42:8; 1 コリ 10:31 参照）。（2）神に栄光を帰すことは、私たちの**至上の喜び**である。なぜなら、私たちは**この方からのみ**終わることのない喜びと満たしを受けるからである（イザ 55:1–3; ヨハ 15:11 参照）。（3）神に栄光を帰すことは私たちの**究極の運命**である。なぜなら、**この方だけが**私たちに栄光ある臨在との親しい交わりを与えてくださるからである（イザ 11:9; ヨハ 17:24 参照）。[141]

ほめたたえられるべき存在は、神だけです。そして、クリスチャンもまた、このような方の恵みによって贖われた存在として、この方をほめたたえるべきです。天における 4 つの生き物や長老たちの賛美は、先の神学者の言葉を借りるならば、私たちの「最高の務め」の模範を示してくれているのです。

さて、長老たちの賛美の中心は、神が万物の創造主であるということです（11 節 b–c; 参照：10:6–7; 14:7）。11 節 c の「みこころのゆえに、それらは存在し、また創造されたのです」は、万物が創造の御業によって存在するようになったという順番が入れ替えられているように思われます。もしかすると、3:3 の「受け、聞いた」のように、強調のために順番が入れ替えられているのかもしれません（当該節講解ノート参照）。その場合、強調点は、神の「みこころのゆえ」に万物が存在していることにあるといえます。

もうひとつの可能性は、「存在し」と「創造された」を繋ぐ接続詞カイ（καὶ）を説明や補足を示すものと理解し、「みこころのゆえに、それらは存在し、すなわち創造されたのです」と読むことです。

正確なところは分かりませんが、賛美の後半では創造への言及で万物の「存在」が挟まれているサンドイッチ構造になっていることからすると、ここでは神が万物を存在させておられることがほめたたえられているように思われます。

事実、私たちを含むこの被造世界が今も滅びることなく存在し続けているのは、まず神が創造してくださったからであり、そして神がその存在を保つという意志（御心）を持っておられるからにほかなりません。聖書は、神の創造と被造世界の存在がほめたたえられるべきだということを、当然の事実としています。よって、信仰者には、この被造世界を神の創造の御業として愛し、それをお造りになった神をほめたたえることが求められているのです。

はじめにで述べたとおり、4–5 章は、6 章から神のさばきが示されていく上での舞台設定

[141] B. A. Ware, “The Glory of God in the Doctrine of God,” in *Building on the Foundations of Evangelical Theology*, eds. G. R. Allison and S. J. Wellum (Wheaton, IL: Crossway, 2015), 150.

を整えるセクションとなっています。そのセクションが、創造主なる神の栄光を賛美するところから始まっていることは注目に値します。

6 章以降の神の御怒りとさばきは、私たちにとっては受け入れ難いことでもあるかもしれません。しかし、黙示録は、そのさばきが創造主なる栄光の神によるものであるという事実を読者に突きつけてきます。神は、被造世界の歴史を最初から最後まで支配しておられる方です。この方だけが地上をさばく権威を持っておられることは、言うまでもありません[142]。そして、このような完ぺきで権威ある方からさばきが下されるのであれば、私たちにはそれに不平をぶつける権利はないのです。

しかし同時に、私たちは黙示録全体から 6 章以降のさばきの「目的」を見据えた上で、4 章からのメッセージを受け取る必要があります。そのさばきが下されるのは、地上の悪の力が滅ぼされ、神の王国がイエス・キリストを通して実現するまでの道を整えるためです。御心によって万物を創造し存続を保っておられる主権者なる神は、さばきと御国を通して万物の「回復」（使 3:19–21）と「和解」（コロ 1:19–20）を成し遂げようとしておられるのです。

以上のことは、地上の視点から見れば、ここで起こるすべての事柄の背後には神の力ある御手がはたらいているという事実を教えてくれています。この地上で起こることは、私たちにとっては時に理解し難く、悲劇的です。しかし、すべては神の御心が成し遂げられるために、神の主権の中で起こっていることなのです。ローマ帝国による迫害の最中にあった当時の読者にとって、創造主なるまことの神がご自分の御心に向けて世界を治めておられるということは、大きな慰めとなったことでしょう。現代の私たちにとっても、その事実は慰めとなります。この世界で起こることはすべて、私たちの究極の希望である神の御国に向かって繋がっているのです。ある注解者が、次のように述べているとおりです。

> 神を主権者として、創造主として、贖い主として、さばき主として見ることはすべて、この書全体を理解するために、そして私たちの人生全体を理解するためにも重要な神学的土台である。[143]

そして、何にも優る神の主権を正しく認識することは、私たちを神の栄光をほめたたえる賛美へと導くのです。

---

[142] M. Stallard, “Preaching the Book of Revelation,” *The Journal of Ministry and Theology* 18/1 (Spring 2014): 17–18.
[143] Fanning, *Revelation*, 207.